

氏名	樋口 譲二
学位(専攻分野)	博士(医学)
学位授与番号	博乙第2429号
学位授与の日付	平成4年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	LHRH負荷試験による小児期のゴナドトロピン分泌予備能に関する 検討 —高精度LH, FSH測定法(IRMA法)による分泌動態の解析—
論文審査委員	教授 太田 善介 教授 産賀 敏彦 教授 大森 弘之

学位論文内容の要旨

健常小児238例(男161例, 女77例), 下垂体性小人症22例(男18例, 女4例)を対象に, LH-RH負荷テストを行い, IRMA法を用いて, 血清LH, FSHを測定し, その反応面積を用いて小児の発育に伴うゴナドトロピンの分泌予備能を検討し以下の結果を得た。

1) LHの反応面積(Σ LH)は男女とも思春期前の早期から既に加齢に伴う増加が認められた。2) Σ FSHは, 男児では全年齢間において, 加齢に伴う変動は認められなかったが, 女児では幼児期に最も高値を示し, 以後漸減する傾向を示した。3) LHのpeakは負荷後30分にもっとも多く認められ, 年齢差や性差は認められなかった。一方, FSHでは, 思春期の発来とともに, peakの出現が早まる傾向がみられた。4) ゴナドトロピン分泌不全と診断された下垂体性小人症では Σ LHは $-2SD$ 以下の低反応を示した。

以上の結果からLH, FSHの分泌予備能には, 明かな性差及び年齢にともなう変動が認められ, その判定には, 年齢, 性に応じた正常値を用いるべきであると考えられた。特に Σ LHは思春期前の早期から既に加齢に伴う増加が認められ, 従来判定に苦慮していたゴナドトロピン分泌不全を早期に判定する事が可能と思われた。

論文審査の結果の要旨

本研究は健常小児238例(男161例, 女77例), 下垂体性小人症22例(男18例, 女4例)を対象に, LH-RH負荷テストを行い, IRMA法を用いて, 血清LH, FSHを測定し, その反

応面積を用いて小児の発育を伴うゴナドトロピンの分泌予備能を検討したもので、LHの反応面積（ Σ LH）は男女とも思春期前の早期から既に加齢に伴う増加を認め、ゴナドトロピン分泌不全と診断された下垂体性小人症では Σ LHは $-2SD$ 以下の低反応を示すことなどを明らかにし、従来判定に苦慮していたゴナドトロピン分泌不全を早期に判定し得ることを示した。これは臨床上に新しくまた有意義な業績である。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。